

若いお母さんたちへ

わか き 若木が三歳になる頃

杉本 裕子

（若木が三歳になる頃。このころ私は若木に対してとても口うるさく、小言ばかり言うようになっていた。下に生まれた実生が三か月になった頃でもあり若木と私の関係が少し様相を変えはじめていたのだと思う。その頃考えていたこと。）

幼い子どもがいると、近所の子ども達やその母親たちと、毎日のように顔をあわせて、一緒に遊んだり話したり、色々な体験を共にする。

楽しいことも多いが、またときには誰かが泣いたり怪我をしたり、オモチャが壊れたりなくなったり、またそれらの出来事に巻き込まれて、母親がひどくヒステリックになってしまったり、重大なこととはいえないまでも、その場に居合わせたみんなが淋しく悲しい思いをすることがある。すると、私はこういうときについ、誰かをせめて自分の気持ちを落ち着けなくなってしまう。あ

の子があんなふうだからとか、あのお母さんはあんな言い方をしなくてもいいのにと、心のうちでひそかに他の人たちにマイナスをつける。でもそんなことをしていても、なんの役にも立たない。それどころか、言葉には出していないのに、私のそういう見方が若木にも、場合によっては他の子ども達にも伝わってしまったているような気がするのだ。すると、子ども達それぞれ遊びを展開していた豊かな場が、たちまち居心地の悪い、不毛のところに変わってしまう。大人もそうだが、それ以上に子ども達がどんなに、その場を見守る大人たちとの信頼関係に励まされながら遊んでいるのかを、改めて考えさせられる。

人を非難するという安易に走りがちな自分の傾向と同時に、私は若木に対する自分の暴力のことを考える。どちらも根っこは同じなのではないだろうか。若木は今、幼くて弱い存在だから、私は彼を力でねじ伏せることができってしまう。私は母親だから、そうしてもたいていは驕おごりという大義名分を借りることができる。だが、私が感

情に任せて若木を叱り飛ばしたり、意地の悪い、冷たい言葉を投げたとき、また頑かたくなに私の好みだけを押しつけるとき、若木はとも悔しそうな、恨みと怒りをこめた燃える目をして私をにらみ、ぶち返してきたり怒鳴り返してきたりする。この鋭い怒りは私の大義名分など吹き飛ばしてしまう。行儀や道徳より何かもっと切迫した、もっと本質的なことを訴えているのではないか。その激しさにはっとさせられながら、この子供が怒っているというよりは悲しんでいるのだということに気づかされる。私は今、若木が幼く弱いということに対する、自分の優越を誇示していたのだ。それこそは、子どもとの関係において大人が自らを律していく点であるのに。相手に対する優越に頼っている関係では、自分のことしか見えなくなってくるのだ。そんなことはよくわかっているはずだったのに。でも正直に自分を見つめれば、子育てにおいても、近所の人たちとの関わりにおいても、人間関係のもっとも基本の原理に立ち戻らなければならないようだ。

今ごろこんなことを言っている、私自身の芯に情けないものを感じながら、それでもとにかくがっかりしたまま、ぼーっとしているわけにはいかない。目の前の子どもは五分もしないうちに泣きやんで、また別のことを私のところにもってくるのだ。ただとりあえず、この次は若木にこんな失礼なものはいはしない、今してしまった私のひどい振る舞いをすぐ謝る、その決心を鈍らせないことだけだ。どんなに馬鹿馬鹿しく失敗を繰り返しても、そうすることしかできないのだから。

（実際私は失敗を繰り返しながら、数か月を過ごした。若木は手探りの迷える母親をしりめに、どんどん自己実現の体験を積み重ねている。）

若木は三歳になって急に、同じ年ごろの子ども達、とくに四〜五歳の少しだけ年上の男の子たちと遊びたくてたまらない様子だ。ある日公園に二人の五歳ぐらいの男の子たちがいた。若木ははじめ離れたところからずっと

二人を見ていて、他のことも目に入らない様子だった。

それから次に私が若木に気が付いたときには、二人のそばにいついていて声をかけられている。年上のひとりが若木に「おまえ何歳だ？」と何度もきいている。若木はきかれるたびにくるっと向きをかえて、ダダダッと少し離れたところまで走っていく。そしてまたあの子たちのほうをじっと見るのだ。大きい子たちはそんな若木が何ともうさんくさいのか、こんなことを繰り返すうちに次第にぶぜんとした表情になって、二人して若木をおいかけはじめた。若木はときどき威嚇するような大声をだしながら走り、家のほうに帰る階段をどんどん登っている。私はこのあたりまで遠くから見ていたのだが、若木が怖くなって泣きそうになっているのだらうと思ひ、ここで若木のところに声をかけながら近づいていった。二人の子たちは私に気がついてかどうか、怒ったような顔をして若木のほうを振り返り振り返りどこかに行ってしまった。若木は私に呼ばれて階段を降りてきたが、「大きいお兄ちゃん達と遊びたいよおっ！」と声をふりしぼっ

て泣き声をだしている。

若木はあの二人の子たちとのコミュニケーションが最高にうれしかったのだ。若木の全身全霊が興奮する出来事だったのだ。若木の心と体の奥で目覚めた望みに応えるものを自分で見つけて、自分でそれを得ようとしていたのだ。おまえ何歳だ？ときかれたときの若木の表情は、あの子たちには背を向けてしまったけれど私には見えた。うれしい、うれしいけれどどういうふうに応えたらいいのだろう、どんなふうにしたらかっこいいだろうと迷いながら、精一杯威勢よく頑張っていた顔だった。

そういえばこんなこともあった。スーパーで買いものをしていて、若木はビニールボールをひとつ自分で取ってきた。これを買うのだと自分で決めて、一度は私が持っていたカゴのなかに入れたのだが、また取り出して手に持っていた。しばらくしてレジのおばさんが「お母さんと一緒にいらっしゃいね」といっている声があるのにきがつくと、若木がひとりでそのボールをレジに持って行って差し出している。人見知りをする若木がこんな

ことをしたのは初めてなので、私も驚きながら呼ぶと、若木はこちらを振り向いてニヤッと笑っている。私は一



瞬若木のその表情の語っていることがとても可愛く思えたのだが、すぐ、レジのおばさんが怒っているんじゃないかということに、私の反応はすっかり支配されてしまった。すみませんと謝りながら若木を力ずくでレジの前からひきはなしてしまった。

後になって何度思い出しても心が痛む。どうしてあの時、あのニヤツを受けとめられなかったのだろう。いくらでもやりようはあったのだ。そんなに難しい場面ではなかった。だが、あの時私は自分の弱いところを突かれていたのだ。レジのおばさんに怒られるのは、社会秩序を代表する権威から叱責を受けることであり、すみませんと子どもを引き戻すことで、それに対する従順を示したのだ。実際にあのおばさんがひどく怒っていたということではなく、私のほうの思い込みと過敏な反応だった。私には、自覚している以上に、秩序や権威に迎合する傾向があるようだ。それは以前にも感じた、相手からの優越を求める気持ちにもつながるのではないだろうか。

若木もまたこの時、社会に直接、保護者抜きで、関わろうとしていた。オモチャを買うという社会的な行為を、自分に貯えられている経験を総動員して、まったく自主的にしようとしていた。これは日頃恥ずかしがりの若木にしてみれば、驚くほど勇敢な行為なのだ。この時私のほんの一言の援助があれば、若木にとっても貴重な体験が達成されたのだろう。でもはからずも若木は、私の社会との関わりを観察することになったのだった。

（私は相変わらず低迷しているが、若木は内側も外側もたくましさを増してきている。）

あるオモチャの飛行機は、スーパリーのビニール袋で包むとききれいな三角形になる。日中に一度そうやってくるんであった飛行機の包みを、夕食後にまた持ってきて、もう一度このうえから包んでくれという。私はかたづけものをしていたので、若木がどんな顔をしているかもよく見ないで、「ハイハイ」と受け取りサササッと包ん

で、若木が持つてきていたセロテープでピッと留めて、ポイツと若木の手に返した。その時若木が満足して受け取ったような感じがしたのを覚えている。それからまた私は忙しくして、やっと二人を寝かしつけたあとふと気が付くと、若木の枕元にさっきの包みが置いてあるのだ。

私にはその包みは、なにかをいやし、慰めようとしている若木の気持ちのあらわれているもののように思える。日中若木は外で力一杯遊んでいる。すぐ泣いてしまう女の子をうまく扱えなくて、イライラしているところを私から叱られて頭にきたり、年長の男の子たちに今度自分が泣かされそうになりながら、必死に一緒になつて遊ぼうと、あとを追う。そんな色々な心身の疲れや痛みを、ちゃんと自分で持ちこたえようとしているのではないだろうか。それはもう、母親にうったえて母親に引き受けてもらえることではないのだ。——そうだとしたら、この子どもがこうして自分をいたわり、休ませているということに私は感嘆してしまふ。エネルギーに

活動し、自分のうちからわき出る望みを実現することに全力を傾けているこの子ども。また一方では、そういう活動のなかで感じた痛みを、まるでそれもまた自分の血肉としようとしているかのように包み込み、自分のものとして引き受けている。なんと真面目に、誠実に生きていくのだろうか。私は自分の傷ついた思いも大切にしていこう、若木に励まされた気がする。

そういう若木の傍らにいる私自身のことを考えてみると、若木の充実した、真剣な行為に応じるのには、危うい、すれすれの対応をしていることが多い。しかし私は私で、子ども達の体や生活を整えていくという仕事に一生懸命なのだ。危うくてすれすれでも、今の私にはまだ仕方がないと思う。ただせめて、私の仕事を厚くましく、当然よといった顔で最優先させていくようなことをしないでいられたらいいのだが。

（ふと気が付くと、私は前ほど若木を叱らなくなっている。私のなかで何かが少し、変わったのだろうか。）

若木のほうからの親離れと想っていたけれど、よく考えてみると、お腹に実生ができてから私のほうから若木に、離れろ、ひとりやっつけていけ、と言いついて出していたのではないだろうか。おしっこを失敗してはひどく叱られる。掃除や炊事をしているときに、遊ぼうよとねだるとまたひどく叱られる。眠かったり思うようにならないことがつづいてくずると、しゃきんとしなさいと怒鳴られる。

私が何だかイライラしていたあの頃は、色々なことが時期を同じくして起きていたのだと思う。妊娠・出産に伴う私の心身の変調。若木の諸能力の加速度向上。とくにことばによるコミュニケーションの習得。若木の身体の発達、それによって赤ちゃんぼさが抜けていく。私のほうに起こった変化は、以前のように若木を心も体も丸ごとすっぽり受けとめることができなくさせたのじゃないか。若木のほうも、私の腕のなかにすっぽり納まる大きさではなくなってきた。そして私たち母子の関係

が少しずつ変わりはじめた。お互いにとって大切なことが一度に芽吹いているこの時期を、しっかり自分自身に刻みこむように過ごしていきたい。

